



みどりの風

平成27年5月1日発行
校報 第519号
(みどりの風 第62号)
練馬区立関町北小学校

アメリカ・インディアンの教えに学んで

校長 大野 泰弘

4月下旬に、安倍晋三総理大臣が、我が国の歴代総理として初めて、アメリカ合衆国の上下両院合同会議の場で演説するというニュースが伝わってきました。戦後70年の節目としてなのかどうかは定かではありませんが、我が国の政治史においては、歴史的な出来事なのでしょう。ただ、現在の平和と繁栄を子どもたちが暮らす未来へと確実につなげていくためには、単に区切りや節目というだけでなく、私たち大人一人一人が自らの役割を深くとらえていくことが必要ではないか、そんなことをあらためて考えました。

さて、そのアメリカ合衆国において、1776年の建国以前、つまり、ヨーロッパからの移民が始まる前は、広大な大地を舞台として、先住民族であるネイティブ・アメリカン(=アメリカ・インディアン)が生活を営んでおりました。

そして、彼らの中には、次のような「アメリカ・インディアンの教え」というものがありました。有名な教えなので、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。

批判ばかり受けて育った子は、非難ばかりします。
敵意に満ちた中で育った子は、だれとでも戦います。
冷やかしを受けて育った子は、はにかみ屋になります。
ねたみを受けて育った子は、いつも悪いことをしているような気持ちになります。
心が寛大な人の中で育った子は、がまん強くなります。
励ましを受けて育った子は、自信をもちます。
褒められる中で育った子は、いつも感謝することを知ります。
公明正大な中で育った子は、正義心をもちます。
思いやりのある中で育った子は、信仰心をもちます。
人に認めてもらえる中で育った子は、自分を大事にします。
仲間の愛の中で育った子は、世界に愛を見つけます。

- 加藤 諦三 著「アメリカインディアンの教え」より -

この教えは、子どもたちは、その環境の如何によって、よりよい心を育んだり、人としての望ましい生き方を学んだりするものであるということを示しています。アメリカ・インディアンの人々は、ヨーロッパからの移民に故郷を奪われるまでは、苛酷な自然の中で部族というコミュニティを形成し、お互いに助け合いながら、「与え尽くす」ことを精神文化の支柱として暮らしていたのだそうです。上記の教えは、おそらく、その日々の生活の中から得られた貴重な教訓なのでしょう。

これを現代に当てはめてみますと、子どもたちを取り巻く(学校・家庭・地域社会における大人のかかわり方・意識の持ちよう、考え方が大事であるということ)につながってきます。学校として考えれば、子どもたちの心を豊かに育む教育環境をどのように整えていくかを見つめ直し、日々実践していかなければならないと指摘されているようにも思えます。

ところで、今月末には、運動会が行われます。適切な競争意識は、子どもたちの心を強くたくましく育てますが、その過程においては、人に対するやさしさや思いやりで満ちた心を子どもたちに育むことも求められます。単なる結果だけにとらわれることのないように、子どもたちの心の成長を促し、また、一人一人の心に確かな達成感・成就感・所属感等を育むための準備期間を過ごしたうえで、運動会当日を迎えたいと思います。5月には、運動会以外にもいろいろな学年行事が予定されておりますが、アメリカ・インディアンの教えを参考にいただきながら、子どもたちの日々の努力に温かい眼差しを送ってくださいますとたいへん有難く存じます。引き続き皆様のご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。